読書の概念(一)

――「読む」という行動について――

室伏　武

「…なぜ書物は重要であるか、その理由をご存じかな？　そこには、ものの本質がしめされておるのです。われわれがものの本質を知らなくなってから久しい。では、本質とはなにか？わしにいわせれば、それはものの核心を意味する…。」

「…第一に大切なのは、われわれの知識が、ものの本質をつかむこと。第二には、それを消化するだけの閑暇をもつこと。そして第三には、最初の両者の相互作用から学びとったものに基礎をおいて、正しい行動に出ることにある。…」

――レイ・ブラッドベリ著　宇野利泰訳『華氏四五一度』
早川書房　昭和五十年（ハヤカワ文庫）――

読書（reading）とは、書かれた（あるいは印刷された）言葉[1]を媒介とする人間相互の伝え合いの様式であり、著者と読者との対話である。読者が書かれた言葉を理解しその内容を受容することを通して自己創造をする知的活動であ

る。書かれた言葉である「もの」を理解することと、言葉が運ぶ伝達内容である「こと」を理解することが「読書」として統一された読者の主体的行動であると言うことができる。このような読書は、書かれた言葉を「読む」という言語行動である「読書行動（reading behavior）」と、「読むこと」を通して行なわれる言語活動である「読書活動（reading activities）」との二つの領域がある。前者は、書かれた言葉の理解とその意味内容を受容する「読むという行動」である。この読むということは、書かれた言葉の言語と言語体系による意味内容の理解であり、それは、「言語的理解（understanding language）」と呼ぶことができるものであり、言語行動の一つである。言語行動としての読書は、書かれた言葉を言語としての言語体系を記号解読、読解、解釈、鑑賞することによって理解するということであり、人間の言語的認識の作用であると言うことができる。このような読書行動は、「読み＝書き」として「話す＝聞く」や「考える」ことと同じように国語学および言語学の対象となる学問領域である。後者は、書かれた言葉の伝達内容である知識、知識体系を享受する「読むという働き（機能）」である。この読むという働きは、書かれた言葉の言語的理解から内容の理解への展開であり、「知識的理解（understanding knowledge）」と言うべきものであって言語活動の一つである。書かれた言葉の内容の理解は、言葉を通してそれが伝えようとする知識や知識体系を理解することであり、知識的認識であると言うことができる。この言語活動としての読書は、言葉の理解から内容理解へと読者の精神的世界を拡げることであって、「知る」「考える」ことである。この知識の世界は、哲学、歴史、文学、社会、自然などの知識学、つまり学問の対象となるものである。この両者は、書かれた言葉の言語的理解から知識的理解への展開によって読者の自己創造を実現させるものであって別個に存在するものではない。それは、言語の本質が「もの」と「こと」とから成り立っているからであり一つの世界であることにある。この読書行動と読書活動とが読書と

呼ばれる一つの世界を構成している。

このような読書は、書かれた言葉の単なる理解にとどまることなく表現、特に行動化（ないしは経験化）ということも含まれるものである。それは、理解と表現の言語的行動であり、自己創造という言語的活動である。そこには、理解＝反応＝同化＝活用という読者自身への個人化や社会化が行なわれる。[2] このことは、人間における「言語的統一」であることにほかならない。人間の存在がすべて言語によって律せられているということである。つまり、読書とは、書かれた言葉との対話によって精神の世界を形成することにより自己創造することであり、それは、人間として「生きる」ことであると言うことができる。このような書かれた言葉の言語的理解と知識的理解とが統合された読書は、それが科学として解明されることにおいて「読書学（reading science）」が成立する。なお、本稿は、読書行動を扱い、読書活動については稿を改める。（図1参照）

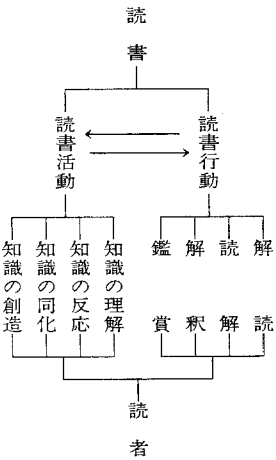

図1　読書の構造

一　「読む」という行動――言語的理解

読書における「読む」という行動は、書かれた言葉とその意味内容を理解することであり、言語的理解であると特徴づけて言うことができる。この「読む」[3] ということは、視覚的な働きによって文字を知覚し、その意味を認識することである。語、文、文章を言語体系に従って意味内容を把握し、それらを再構成したり推論、思考や鑑賞などの学

習行動がそこに見られる。こうした学習行動としての読書は、「こと」を書かれた言葉で「理解」することであり、「こと」を「創造」することである。それは、人間を「創る」ことであり、その基礎であると言うことができる。

このような「読む」ことは、「読み」と「読み方」とがある。書かれた言葉を話された言葉によって「解読（literal decoding）」する読みとその読み方としての「音読（oral reading）」と、著者の意味を把握する「読解（literal understanding）」と「黙読（silent reading）」や、伝達内容を読者の立場から理解する「解釈」（literal interpretation）」と「批判」「推論」「思考」などの読み方、および著者の知識や考え方を新しい背景のもとに適用することや情緒的な反応など高度な読みである「鑑賞（literary appreciation）」と「味わい方（aesthetic reading）」との四つの読みから成り立っている。これをR_1、R_2、R_3、R_4と呼ぶことができる。(4)

これらは、一つに発達段階に応じたものである。それは、言語の発達を基底として$R_1 \Downarrow R_2 \Downarrow R_3 \Downarrow R_4$へと段階的に発展する「発達的読み（developmental reading）」と言われるものである。二つには、「解読＝音読」から「読解＝黙読」へ、そして「解釈＝批判、思考」へ、さらに「鑑賞＝味わい方」にと発展する。そこには、言語能力、技能としての「読書能力」と「読書技能」とが発達段階において必要とされる。特に、読書能力は、小学校の段階で完成する。(5) 三つには、こうした読みが読書の能力や技能ばかりでなく、「経験の発達（developmental experience）」と深くかかわりをもっている。この能力、技能と経験とのかかわりは、R_1からR_4に進むに従って経験ということが重要となる。小学校六年までは、読書能力と技能が中心であり、中学校、高等学校や大学あるいは成人へと進むに従って経験の豊かさが重要となる。読書能力で読むことから経験で読むというように発展すると言うことができる。(6) 四つには、この「読み」や「読み方」は、教育されることによって獲得されるものである。この高度の読書能力と技能の育成は、学

校教育における中心的課題であると言って過言ではない。五つには、このような「読み」によってわれわれは「人間」となるばかりでなく、人間としての生活において欠くことのできない最も重要な資質であり、基本的人権の一つであると言うことができる。なお、この「読み」は、小学校の時代の基本的課題であると言える。（図2参照）

図2「読み」

（一）解読――記号変換

言語的理解としての「読み」の第一（R_1）は、書かれた言葉における文字言語の「記号変換（decoding）」としての「解読」が行なわれる。この解読は、文字言語を音声言語に「記号変換」をすることによって、音声言語である話し言葉において理解することである。それは、書かれた言葉である文字言語は、話し言葉である音声言語を「文字」に記号変換したものである。したがって、その文字を読むためには音声に変換して元の形に戻すことによって理解することが求められることになる。つまり、解読ということは、文字言語を音声言語に変換して読むことである。この文字を音声で読むということは、書かれた言葉の読みの基本であり、正しく言葉を理解するための基礎であると言うことができる。それは、すべての言葉は、話し言葉（音声言語）を基にして成り立っているばかりでなく、その原型であるからである。（図3参照）

この解読は、したがって、「音読」の形式で行なわれるものである。文字は、「よみ」と呼ばれる音声を伴うものであり、音声が文字によって表現されることによって音声が消え視覚的な世界が形成される。書かれた言葉の音読は、「読み」であり、「読み方」であるとする理論が長く支配していたのはそれなりの理由があったと言うことができる。

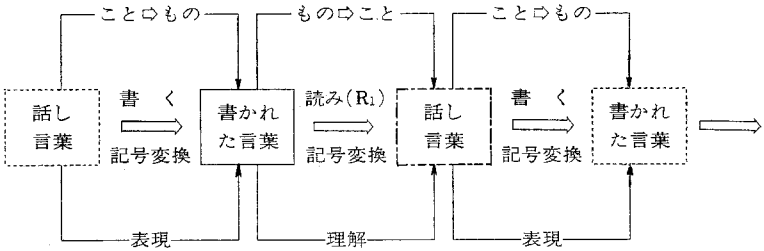

図 3　解読（R_1）

この音読＝読みは、言葉の理解に優位性があるが、内容の理解には黙読が優れていると考えられるようになって音読が読みのすべてではなくなったと言える。とはいえ、書かれた言葉の理解は、音読による読みを基本とすることには変りはない。特に、文字言語の学習における入門期や基礎的学習においては、音読による理解と表現とは最も重要な方法である。このように、読みにおける解読は、書かれた言葉を理解する基礎であるばかりでなく、第一の読み（R_1）であると言うことができる。

（二）読解――書かれた言葉の理解

解読としての読みは、文字言語を音声言語で「よみ」を行なうものであり、それは記号変換であって素読である。この解読に対して、読解は、書かれた言葉である文字言語を「言語的理解」をすることである。この言語的理解は、書かれた言葉の記号と記号体系に

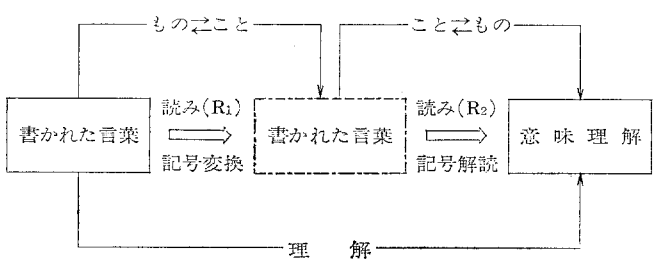

図 4　読解（R_2）

基づいて、その意味を理解することである。それは、「もの」から「こと」へということであり、「語」と「文章」を言語体系に従って、それが伝えようとしている「意味」を理解することである。つまり、読解ということは、「書かれた言葉の理解」であり、そのことが「言葉の意味」を理解することであると言うことができる。このことは、書かれた言葉――語と文、文章に則してその内容を的確に理解することであり、言葉を言葉として理解することである。このように読解は、書かれた言葉とその意味を読むことによって理解することであり、その意味内容を受容することである。（図4参照）

この読解は、書かれた言葉である文字言語の「よみ」を黙読によって読むことである。文字言語の「よみ」を音声化して読むのではなく、眼で読むのである。この読みの視覚化は、文字＝音声を伴わないよみ＝意味の理解をすることである。音読より黙読の方が理解の度合が高いし、速さがあることに特色があると言うことができる。とはいえ、文字言語の「よみ」ができなければ書かれた言葉を読むこと、つまり理解することはできない。

この黙読は、眼球運動と、視覚的認識であり、指さし、唇読、心読などの読みが伴うと理解と速さが悪くなる。それは、「よみ」の視覚化である。特に、音読が一本の線を音声でたどるのに対して、黙読は、空間的な読みができるゲシュタルト的な認識ができることに大きな特徴がある。なかでも、日本語は、この条件に最もよく適した言語であると言うことができる。

（三）解釈――書かれた言葉の内容理解

読解が書かれた言葉を理解しその意味を把えることであるのに対して、「解釈」は、言葉⇩意味⇩内容の理解へと

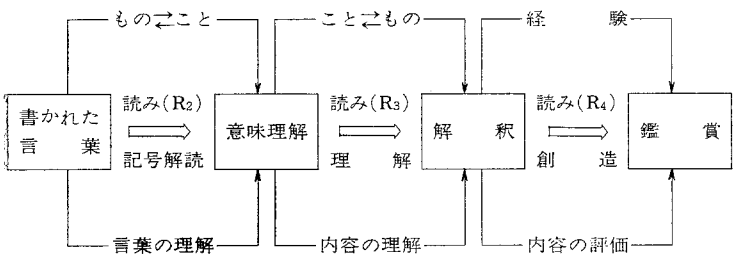

図 5　解釈（R_3）

高度化されるばかりでなく、読者の書かれた言葉に対する反応である推論や評価などが加わる高度な理解であると言うことができる。この解釈としての読みは、書かれた言葉における著者の表現しようとすることを吟味し評価することである。このことは、解読、読解のように書かれた言葉を著者の表現に従って読み取りそれを受容するのに対して、著者が伝えようとする「こと」を理解しそれを読者の理解や経験とのかかわりで解明したり再構成したりすることである。書かれた言葉と読者との相互作用であるが著者の言おうとすることを読者として理解することにあると言うことができる。この理解は、伝達内容を吟味しながら、著者の表現に沿って主題、文章の論理的構成や展開および理解したことを再構成することである。（図5参照）

この解釈は、書かれた言葉の吟味や再構成など著者の表現に従って理解することである。こうした理解には、「批判的読み（critial reading）」「考え読み（thinking reading）」の読み方が必要とされる。批判的読みということは、読者の理解や経験によって著者の表現している「こと」について比較、長所と短所や意見あるいは感想などによって読むことで理解することである。つまり、読者と著者とのかかわりにおいて著者の立場から書かれた言葉を読むということである。次に「考え読み」は、著者の意図や叙述および内容についての論理とその展開、文章構成などの書かれた言葉の論理を読むことにおける思考や推論などがある。また、批判的読みにおける批判的思考

や、文章を理解する論理的思考など解釈におけるものばかりでなく、読むことのすべてにおいて考えることが要求されるものである。このように、解釈法は、書かれた言葉の批判や思考によって達成される。

（四）鑑賞――書かれた言葉の審美的理解

鑑賞としての読みは、書かれた言葉に対する情緒的、審美的な反応であり、読者の心の中にイメージ（心像）を形成することである。このイメージは、書かれた言葉に対する読者の感想を言語化することである。つまり、読者が感じたことを「言葉の絵」として描くことであると言うことができる。こうした鑑賞は、書かれた言葉の「もの」と「こと」との統一的な理解に基づいて、内容の明確化とそれに対する情緒的な反応、書かれた言葉への反応や、イメージの形成など書かれた言葉の理解を超える新しい世界を読者の中に創造することである。この読みの感想は、書かれた言葉の読者の心理的な反応であり、「もの」と「こと」への反応であると言うことができる。また、この鑑賞は、書かれた言葉を拡張、実現のための考え方や価値を適用すること、つまり、経験化することも鑑賞と同じように重要な読みであると言える。

この鑑賞は、書かれた言葉の極限を超えた世界を追求し、発見することである。こうした新しい世界は、書かれた言葉の世界と読者の世界とのかかわりにおける創造である。それは、「創造的読み」と呼ばれるものであり、それは「鑑賞」と「味わい方」の方法が必要であると言うことができる。この創造的読みの世界は、読者の主体的な精神の世界であり、そこには、「読みの世界の創造」が展開することである。

読みとしての鑑賞は、書かれた言葉の世界における「真実」「美しさ」と「善さ」を求めることであり、それを発

見することであると言える。こうした鑑賞は、書かれた言葉を見いだす手法としての「味わい方」がある。書かれた言葉の味わい方とは、「朗読」による言葉の世界の美しさを読むことである。「読み」によって読者の心の中に「心像（イメージ）」を形成し、その精神の世界を拡げることである。

このように「読む」ということは、基本的には書かれた言葉の「言語的理解」である。この言語的理解は、R_1からR_4へと段階的に展開する。それは、言葉を言葉として理解するものから高度な理解へと進むものである。そこには、読書能力と技能の段階的発達とも一致するものであり、高度な能力や技能を必要とするものである。同時に、学校教育における読書教育の重要な課題であると言うことができる。

二　「読む」ことの分類――読書的理解

「読む」ということは、基本的には書かれた言葉の言語的理解であり、それは言葉の理解から意味内容へと進み、やがて表現的行動へと発展する。この書かれた言葉の言語的理解は、「読む」という理解作用であることから「読書的理解（reading comprehension）」であると特徴づけて言うことができる。この読書的理解は、したがって、「読む」ことによって理解することである。すなわち、「わかる」「まとめる」「考える」「組み替える」「創る」などの理解と表現の言語的行動であると言うことができる。このことは、書かれた言葉を「読む」ことによって読者の知識、技能、態度として組み入れることである。この体制化は、書かれた言葉の受容であり、自我体系の中に精神の世界を形成することである。別な言い方をするならば、読むことによる読者の「言語的統一」であると言うことができる。

(一) 読書的理解

このような「読む」ことによる理解には、書かれた言葉の認知、理解、反応、同化、活用とそれぞれの速さの六つの面があり、それらが総合されたものである。[7] これらは、読書過程であり、そこにおける能力や技能である。このことは、したがって「読む」ことの階梯であるばかりでなく、それぞれが固有な存在である。そこに、読書的理解の構造とその特徴とを見いだすことができる。

この読書的理解は、「読む」ことによる認識の問題であり、その構造は、モデルと呼ばれる形式において解明される。この読書的理解のモデルは、「読む」ことの能力や技能、理解の過程や指導の方法などを明らかにするための基礎となるものである。したがって、この「構造」を解明することは、読書的理解の本質を研究するために不可欠なものであり、モデルは、研究や指導のための用具となるものである。

(1) 文字言語の知覚 (word perception)

書かれた言葉の表現体系である文字言語、特にその単位である「語」を知覚することから「読む」ことは始まる。この語の知覚は、文字の識別、よみ（発音）、語義、語の意味を理解することである。そこには、語を知覚する技能、語の意味を認知することから成り立っている。そこには、文字の知覚における形態素、よみにおける音素、語義における概念、語の意味や用法など問題がある。

(2) 理解 (grasp of what is read)

理解とは、文、文章を理解することである。語とその順序づけや修辞などの書かれた言葉の体系を理解することで

ある。それは、正確に読み取ることであり、さらに、「行間を読む」ことも加えられる。つまり、この理解には、一つに書かれた言葉の理解であり、語とその言語体系に従って意味内容を明確に把握すること。二つに書かれた言葉が内容として含まれている意味を読み取ることに分かれる。そして、前者から後者へと読み進まれることによって理解を深化拡充することになる。

(3) 反応 (reaction)

反応とは、書かれた言葉の表現主体である「著者」が提示している考え方や趣旨および背後にあることがらに焦点を当てて読むことである。著者の意図、表現、内容などに対する読者の知的な判断と、情緒的な反応との二つがある。これらは、著者に対する考え方に「反応」することと「評価」することの二つがある。この反応と評価は、情緒的なものと論理的なものとがあり、ともに「批判的読み」と呼ばれるものである。この批判的読みは、読者の主観から客観へと展開することに意味がある。つまり、「反応」ということは、こうした反応と評価とが統一されたものであるからである。

(4) 同化 (assimilation)

同化ということは、書かれた言葉を「読む」ことを通して獲得した情報と先有経験とが「同化」し、読者の中に体制化することである。この同化は、理解と反応のように書かれた言葉を理解し「知る」ことに対して、読者の体制の中に「組み込む」ことであることに特徴があると言うことができる。このことには、読者の先有経験と読書的理解によって確保した情報や知識との「融合」、「結合」や、「批判的判断」、「批判的思考」の働きによって作用するものである。この「同化」としての「読む」ことは、読者が自分自身の知識、技能、態度に読むことによって得たことを

「体制化」することである。その結果、読者は、「読む」ことによって人間性を拡張することができる。

(5)　活用 (utilization)

活用ということは、「読む」ことによって獲得した情報や知識、技能、態度、あるいは著者の書かれた言葉における表現などを読者が適切に利用することである。同化ということが読者への体制化であり、求心的な志向性を具有するものである。この自我への拡充に対して活用は、読者の主体的な生活において遠心的な方向において作用させるものであると言うことができる。この外への志向性は、同化の個人化とその人間性の追求に対して、社会化であり、そこには社会性を本質としているところに特徴があると言うことができる。

(6)　速さ (rate)

「読む」ことにおける「速さ」は、語の知覚から活用までのすべての「面」において「速さ」が求められる。「語の知覚」の速さ、「理解」の速さ、「反応」の速さ、「同化」の速さ、「活用」の速さは、読者の目的と読み物の性質とのかかわりにおいて「弾力性」と「順応性」とが必要とされる。この「読む」ことの「速さ」は、「読む」ことの多様な要求と状態において、それぞれの要請を満たすことであり、したがって、それは、きわめて多様であると言える。

このように、読書的理解は、書かれた言葉の正確な理解と、それに基づいて読者の個人化と社会化という営みにおいて人間性を拡張するものである。

(二)　読書的理解の分類

「読む」ことによる理解は、書かれた言葉を理解し、組織して、それを利用することである。それは、読書的認識と

いうことができるものであり、「読む」ことによる理解と表現の人間の行動である。この「読む」ことは、したがって、書かれた言葉の「理解」「再構成」「評価」「鑑賞」の範疇に分類（taxonomy）することができる。[8] この範疇は、「読む」ことの様式であり、「読む過程」である。これらは、固有な領域を持つばかりでなく、易から難への階梯において順序づけられるものである。そこに、「読む」ことの発達的課題が形成されるばかりでなく、「読む」ことの指導のための指導内容であると言うことができる。つまり、「読む」ことの範疇は、「読む」ことの具体的な内容そのものであって、「読む」ことの能力や技能の基礎となるものである。そして、この「読む」ことの認識は、「読む」という言語活動であるから、究極的には「言語的統一」である。

(1) 言葉の理解（literal comprehension）

言葉の理解とは、書かれた言葉の意味を理解することである。そこには、「もの」の理解と、「もの」から「こと」を理解することがある。それは、字句の理解から文章の意味内容を理解することまでにわたっている。つまり、この言葉の理解は、文字理解と文章理解とがある。

(ア) 語のよみとその意味を理解する。

(イ) 文、段落、文章など表現に従って意味を理解する。

(ウ) 「鍵」になる語を理解する。

(エ) 文章構造を理解する。

(オ) 著者の表現しようとする意図を的確に理解する。

(カ) 読者の目的に従って、書かれた言葉の内容を理解する。

(キ) 書かれた言葉の種類や形態に応じた理解ができるようにする。

(ク) 登場人物や出来事など「こと」についての比較や識別をする。

(2) 再構成 (reorganization)

再構成とは、書かれた言葉を「読む」ことによって、読んだことを分析、総合、あるいは再構成することによって、新しい情報や知識を創造することである。この組み替えは、読者の知識生産の目的と、めざす結果（仮説）とのかかわりにおいて、著者が提示した情報や知識を評価し、活用することによって新しい情報や知識を創ることである。そこには、「まとめる」ことから「発見」までの段階がある。それは、読者の目的と「読書的経験 (reading experience)」とその発達的段階において決められる。

(ア) 「こと」を時間、空間、人、物、出来事などによって分類する。

(イ) 「こと」を概要の様式にまとめる。

(ウ) 「こと」を要約の様式にまとめる。

(エ) 「こと」を一つあるいはそれ以上の考え方や情報を読者の目的に従って再構成する。

(3) 評価 (evaluation)

評価とは、書かれた言葉に対する批判であり、そこには批判的思考 (critical thinking) が要求される。それは、「批判的読み (critical reading)」と呼ばれるものである。この評価は、読者の経験、知識、価値観などによって行なわれるものであり、きわめて主観的である。

(ア) 現実と架空なものとの識別をすること。

(イ) 事実と意見との識別をすること。
(ウ) 内容に対して適切で妥当な判断をすること。
(エ) 読者の経験や信念と、著者の事実、意見としての主たる考え方とを比較し、それを受容または排除する。
(オ) 書かれた言葉の主たる内容を考え方、論理、情緒など読者自身の世界に同化させ、活用する。
(カ) 書かれた言葉における著者の背景を照合する。
(キ) 「読む」ことによる批判的思考を育成する。何が正しいか何を受容すべきかを知る。

(4) 鑑賞 (appreciation)

鑑賞とは、書かれた言葉に対する情緒的、審美的な感受性に基づいて、心理的、芸術的な価値に反応することである。それは、書かれた言葉の手法、形式、様式や構造に関する理解と情緒的な反応が必要とされる。このように書かれた言葉に対する「美的反応」としての鑑賞は、「読書的経験」の世界における「読書的認識」の特徴を見いだすことができる。

(ア) 「もの」に対する美的反応

書かれた言葉の文章表現に対する「美的鑑賞」は、著者が表現したところの言葉に対するものと、読者の美的、情緒的な感受性による反応とがある。

(イ) 「こと」に対する美的反応

書かれた言葉の内容、特に出来事、登場人物や物語に対する読者の感受性による反応である。

(ウ) 「イメージ」に対する反応

書かれた言葉に対する美的反応によって生まれる「言語的イメージ」の形成であり、「象徴化」することである。

注

（1）室伏武　書かれた言葉　亜細亜大学教養部紀要　第二十号　昭和五十四年十一月
室伏武　印刷された言葉　亜細亜大学教養部紀要　第二十四号　昭和五十六年十一月

（2）室伏武　読むことと人間形成　児童心理　第三十七巻十三号　昭和五十八年十二月

（3）室伏武　言語体系の構造　亜細亜大学教養部紀要　第十九号　昭和五十四年六月

（4）読書の定義と性格については、次のような論文がある。
Clymer, Theodore. What is "Reading?"; Some Current Concepts. (Robinson, H. M. *ed. Innovation and Change in Reading Instruction.* Chicago, University of Chicago Press, 1968, pp. 7–29.)
Betts, Emmett. "Reading"; Psychological and Linguistic Bases. *Education,* 74: 454–48, April 1966.
Gibson, Eleanor. Learning to Read. *Science.* 148: 1066–1072, May 21, 1965.
Robinson, Helen M. The Major Aspects of Reading. (Robinson, H. A. *ed. Reading; Seventy-Five Years of Progress.* Chicago, University of Chicago Press. 1966 pp. 22–32.)
Walcutt, Charles C. Reading—A Professional Definition. *Elementary School Journal.* 67: 363–65, April 1967.

（5）室伏武　読書生活における臨界期　児童心理　第二十六巻第十二号　昭和四十七年十二月

（6）前掲書

（7）読書的理解については、ウイリアム・S・グレイ（William S. Gray）のモデルとその修正であるグレイ＝ロビンソン（Gray＝Robinson）のモデルを修正したものである。
Gray, William S. The Major Aspects of Reading. (Robinson, H. M. *ed. Sequential Development of Reading Abilities.* Chicago, University of Chicago Press, 1960, pp. 8–24.)
Robinson, Helen M. The Major Aspects of Reading. *op. cit.*

（8）読書的理解の分類については、次の文献があり、主として Thomas C. Barrett の分類を参考とした。

Barrett, Thomas C. Taxonomy of Cognitive and Affective Dimensions of Reading Comprehension. (Robinson, H. M. *ed. Innovation and Change in Reading Instraction. op. cit.*)

Letton, Mildred C. Evaluating the Effectiveness of Teaching Reading. (Robinson, H. M. *ed. Evaluation Reading.* Chicago, University of Chicago Press. 1958. pp. 76–82.)

Clymer, Theodore. *op. cit.*

Spache, George D. *Toward Better Reading.* Champaign, Ill., Garrard Publishing Co. 1963.